

講演 3

伝統養蜂にみるハチとヒトの関係

福島県立博物館主任学芸員 佐治 靖

福島県立博物館の学芸員をしております、佐治と申します。よろしくお願いたします。

私が、今日、ここで話をさせていただく内容は、タイトルに掲げましたように伝統養蜂を通して見えてくるミツバチとヒトのかかわりあいについてです。

先に講演された梅谷先生、松香先生のお話は、どちらかといいますと生物学的な視点、農学的な養蜂研究の立場から、ミツバチという昆虫そのものに主眼をおいてのご発表ではなかったかと存じます。

事務局からお聞きしたところによれば、ここにお集りの皆さんの多くは、生態学や生物学がご専門であったり、また直接ミツバチを扱う養蜂業に従事されている方々であったりとうかがっております。そうした皆さんの期待や関心とは、ちょっと違った、あるいは期待をはずす内容であるかも知れません。今日、私がこれからお話する伝統養蜂へのアプローチは、ヒトの側に力点をおいた、いうなれば民俗学的、あるいは文化人類学的な視点からみたハチとヒトの関係です。その点、ご了解いただければと存じます。

さて、先ほど梅谷先生のお話にもありましたように、日本の山野には在来のニホンミツバチ (*Apis cerana japonica* Rad.) が野生しております。そして、その生息分布と重なり合うように、山間の村々を中心としてこの野生のミツバチを利用した養蜂というものが存在しているのです。

簡単に私の関心を申しますと、この日本の山野に野生するミツバチそのものの生態でも、あるいはこの野生のミツバチをより効率的に飼育するための飼育法でもありません。それぞれの地域で、この野生のミツバチを人びとがどのような方法で捕獲し、どのように飼養し、そして

蜜をしぼるのかといった伝統的な民俗知識や技能についてです。「そんなの調べてどんな意味があるの！」といわれそうですが……。

確かに、ニホンミツバチの伝統養蜂は、セイヨウミツバチを用いた近代養蜂のように高い経済的な効率や価値という点では、これに及びもつきません。市場における経済的な価値は皆無に等しいといってよいでしょう。また伝統養蜂の知識や技能が、ミツバチそのものの新たな利用や養蜂の技術革新や発展に直接寄与する可能性も、正直、期待できるものではないのです。

しかし、伝統養蜂の知識や技能には、一般的な関心である経済的な価値とはまた違った価値があります。まず明らかなのは、「経済的意味合いが低いにもかかわらず、根強く続けられていること、はまると説明されるように人びとを引き込む魅力をもって存立している」という事実がその価値を物語っています。後に個別には触れていきますが、研究テーマとしても、ヒトがニホンミツバチという自然の資源をどのように認知し加工したのかといった「資源利用」や「家畜化」をめぐる課題、野生のミツバチと向き合うなかに見いだせる「自然観」、労働全体のなかでの伝統養蜂のもつ「労働」の特質など、これらを考えていく多くの手がかりが、このニホンミツバチの伝統養蜂には内在しているのです。

まず、こうした経済活動を前提としない養蜂へのアプローチもあるのだということをご承知いただければ幸いです。

はじめに、民俗学や文化人類学といった研究の分野が、どのような方法で研究対象と向き合うのか、そのことを伝統養蜂と関連させながら、少し説明しておきたいと思います。これらの研究分野の方法論的な特徴は、なによりもフ

ィールド・ワーク（実地調査）によって、文化や社会をできるだけ具体的・実証的にとらえて、そこで明らかになった事象を比較研究するというところに特色があります。つまり、対象とする地域に出かけていって、「直接、話を聞く」聞き取りや、「実際、作業や行事を目で確認する」参与観察などの方法によって研究対象に迫っていくのです。ニホンミツバチの伝統養蜂の調査もその通りです。しかし、そこへ行き着くために、まず一つの苦労があります。先ほど梅谷先生が「ニホンミツバチの伝統養蜂は、山間地域で細々とおこなわれている」とお話になりましたが、まさにその通りです。そのため、「どの地域でおこなわれているか」、まず分布や所在を調べることから始めなければなりません。

もし、私が、今日お集りの中にいらっしゃるような養蜂を生業する方々の調査をするとしたら、養蜂協会の会員名簿や職業別の電話帳をもとに、それほど苦労なく養蜂家の方のもとへたどり着くことができようかと思えます。しかし、先にも触れましたが、ニホンミツバチの伝統養蜂は、生業として成り立つような養蜂ではありません。むしろ遊びに近いものです。そのため、規模も小さいですし、どの地域でやっているのか、また地域のだれがやっているのか、把握しにくい。ですから、「だれがどこでやっているのか」を見つけることが、まず、一苦労なわけです。

さて、前置きが長くなりましたが、そろそろ本題に入っていきたいと思えます。まず、改めてニホンミツバチの伝統養蜂を取り上げる意義と課題について述べておきます。小規模で、経済性は低く生業としても成り立たない、ある種〈遊び〉や〈趣味的〉と評されるニホンミツバチの伝統養蜂を取り上げることに、どのような意義があるのでしょうか。

一つは日本人の自然観の問題です。日本人がどのような自然観を有してきたのか、そのことを考えていく上で、この伝統養蜂は多くの手がかりを含んでいます。当たり前といえば当たり前なのですが、伝統養蜂は、ニホンミツバチと

いう野生のミツバチを対象とします。この野生のミツバチを利用するというのが、実は重要なのです。まず、この伝統養蜂を成立させるためには、ミツバチの習性というものを熟知しなければなりませんし、ミツバチが生息する自然環境というものも熟知しなければなりません。さらにそれらの知識を、捕獲し、飼養のための知識や技能に転換させ、はじめて養蜂として成立するのです。この野生のミツバチを用いること、つねに自然から飼養するミツバチを獲得すること、そのためにニホンミツバチの習性を含め自然を熟知した知識や技能を展開させることなど、こうした伝統養蜂のそれぞれの場面で、人びとが展開させるさまざまな位相の自然認識がみえてくるのです。

二つめとしまして、「労働とは」という問題です。いいかえれば、日本人が、元来、培ってきた労働を考える上で、伝統養蜂は興味深い特徴をもっていることです。

私たちは、日々、生活を営むために生計活動をおこない、生命維持に必要なさまざまな栄養素、あるいはそれらを入手するための貨幣を獲得しなければなりません。近代以降の日本においては、「労働観」というものは、先に述べたような生計維持や経済活動に限定した狭義の意味でとらえられてきました。

しかし、実は「労働」というものは、そうした限定されるものだけではないということが、最近、民俗学や文化人類学のなかで指摘されはじめています。とくに西洋近代を一つの指標とした「労働」と異なる労働の実相が、日本においては人びとと自然との関係において顕著にみられるのです。生計の主たる活動にはならない、遊び的な要素を多分にもっている、しかしながら社会的な価値は高い、などの特徴を有する、ある意味では周辺的な労働を考える手がかりを、このニホンミツバチの伝統養蜂は与えてくれるのです。

さらに「労働」と深く関係することとして、自分のものにするという「所有」の概念を考える手がかりも含んでいます。自然に何らかの働きかけをして、もの（ここではミツバチ）を獲

課題

- 伝統養蜂をめぐって駆使される技能を中心として、ニホンミツバチと人びとのかかわりをみてゆく。
- (ねらい)
- 伝統養蜂を通して日本人の自然観・自然認識の把握。
 - 伝統的な「労働」と「所有」の特色の解明
 - 伝統養蜂の技能を通して、野生の生き物を「家畜化」してゆく過程をトレースする。

図1

得する、そしてそれを自分の管理下におくという行為は、まさに「所有」の原初的かたちといえるのです。ニホンミツバチの伝統養蜂のなかにある「所有」を探ることは、私にとってとても興味深い課題です。

このように「労働」と「所有」の再考に、ニホンミツバチの伝統養蜂は、大きな意味をもっているのです。

三つめとしましては、「家畜化」というテーマです。ご存知のように「家畜化」の問題は、人類史を考える上で重要なテーマの一つです。いうまでもなく、私たちの日常生活は、家畜や栽培植物に全面的に依存し成り立っています。人間がこうした家畜や栽培植物を、どのようにして野生の動植物からつくりだしたのか、これまでも考古学、生態学、民族生物学、遺伝学などさまざまな研究分野で、いくつかの動・植物、鳥類などを対象に研究が進められてきました。昆虫に関してみれば、養蚕でのカイコ、養蜂でのセイヨウミツバチなどは、人為により遺伝的な改良が加えられた「家畜化」された昆虫の代表的な例です。

しかし、伝統養蜂で飼養されるニホンミツバチは、近代養蜂で用いられるセイヨウミツバチのように改良がほどこされた、いうなれば「家畜化」されたミツバチではありません。野生のハチそのものです。また、そのハチ群は、原則的には、常に自然から獲得されるわけです。それを前提として、ヒトは、野生のミツバチを捕獲すれば一定期間自らの管理下におき、最終的に蜜をしぼるという作業をおこないます。つまり、ニホンミツバチの伝統養蜂には、半家畜化

(セミ・ドメスティケーション)という飼養形態が浮かび上がってくるわけです。

しかも、そこにあるヒトの側からの働きかけは、強制的(たとえば遺伝学的手法によって)にミツバチの習性を改変しようとするのではなく、ヒトの側がすりよる、そんな言葉で表現されるような知識や技能によっているわけです。それは、少し見方を変えますと、人間が生き物を家畜化していく過程でどのような働きかけをおこなっていたのかという「家畜化」をめぐる人間の役割、さらに飼養の知識や技能を比較研究することによって、ニホンミツバチの伝統養蜂の中にある「家畜化」の過程というものが復元できるのではないかと構想しているわけです。

以上のように、ニホンミツバチの伝統養蜂を研究する目的には、大きく分けまして3つの課題といいますか、興味深い学問的関心があるわけです(図1)。

伝統養蜂の実態

では、具体的な話に移っていききたいと思います。ミツバチの専門家がたくさんいらっしゃる前で、少々、恥ずかしいのですが、ご存知のようにニホンミツバチは、アジアミツバチの一亜種です。その分布の範囲は、北は青森県下北半島から、四国地方、長崎県対馬を含めた九州地方に広く生息し、南は鹿児島県大隅半島まで、おもに山間部を中心として生息しています。近年の状況を、玉川大学ミツバチ科学研究施設の中村さんに教えていただいたのですが、「最近では、山間地域に限らず東京都をはじめとする都市部にも生息していて、墓地や公園など人工物を営巣場所として自然営巣がみられるのだ」ということです。ある意味、ニホンミツバチの環境適応でしょうか。

とにかく、ニホンミツバチの新たな動きはさておき、ニホンミツバチの伝統養蜂の分布は、どうかといいますと、ほぼニホンミツバチの生息域と重なりあうように、広く分布していることが次第にわかってきました。これほど広い範囲でおこなわれていることが明らかになってき

伝統養蜂の実態

- ニホンミツバチの分布・・・北は青森県下北半島から、四国地方、長崎県対馬を含め、南は鹿児島県大隅半島まで、山間地域を中心として広く生息している。
- 生息分布とほぼ、かさなりあうように広く各地に伝統養蜂が継承されている。
- セイヨウミツバチを用いる近代養蜂とは、相互に相いれず存立。・・・サイズ、習性などの違い。

図2

ましたのは、ここ10年ほどのことです。それまでは、紀伊半島、長崎県対馬、中国山地などわずかな地域で、まさに「細々と」おこなわれているに過ぎないと考えられていました。

しかし、近年、これらの地域のほかにも青森県、岩手県、宮城県、福島県などの東北地方、群馬県、山梨県、長野県、さらに四国の各県、九州では大分県、宮崎県、鹿児島県など、山間地域を中心に広い分布で、しかも、それぞれの地域での状況を個々にみますと、「近代養蜂に駆逐されてしまった」「細々と」といった悲観的な状況ではなく、近代養蜂と一線を画しながら、独自の展開をもち、地域によっては「村おこしに一役買うような盛り上がり」をもって継承されている状況が明らかになってきたのです(図2)。

今日は、養蜂の専門家の方が数多く参加されているようなので、詳しくは申しませんが、参加者の中に「養蜂は、一つじゃないの」、「ミツバチって1種類で同じじゃないの」といった、素朴な疑問をお持ちの方がいらっしゃるかも知れません。その点について少し申し上げておきますと、今日、一般に広く知られているのは、近代養蜂といわれ、明治時代になって日本に移入されたセイヨウミツバチ (*Apis mellifera* L.) (厳密にはこの改良種)を用いた養蜂です。これに対して、それ以前から日本でおこなわれていたニホンミツバチを用いた在来の養蜂がニホンミツバチの伝統養蜂(あるいは伝統的養蜂)です。実は、今日、日本には、種の異なる2種類のミツバチを用いた2種類の養蜂が存在しているのです。近代養蜂は、セイヨウミツバチの

サイズや習性を巧みに利用した、生産効率が高く経済性にも富んだ養蜂です。そのため移入以降、急速に日本各地に広く普及していきました。

同じミツバチなら、効率のよい技術で同じように利用できそうですが、セイヨウミツバチとニホンミツバチには、サイズと習性に決定的な違いがあり、効率性・経済性の高い近代養蜂の技術にニホンミツバチを適合させることは、きわめて困難なのです。

また、セイヨウミツバチが、外来種として日本の自然に影響を与えないのか、在来のニホンミツバチを絶滅させたりしないのかといった疑問を持たれる方もいらっしゃるかも知れません。日本には、セイヨウミツバチの自然営巣を阻止する2つの環境があります。一つは冬期間の積雪や氷点下にもなる低温といった気象条件、もう一つは強力な天敵であるスズメバチの存在です。簡単に申しますと、これら要因によってセイヨウミツバチは、日本の自然のなかでは生息することができないのです。

「自然に依存する」の養蜂形態 知識と技能としての自然認識

では、具体的にニホンミツバチの伝統養蜂の形態とその特徴について見ていくことにしましょう。

ニホンミツバチの伝統養蜂の、最も特徴的なことは、これまでも述べてきたように、飼養するためのハチ群の獲得を、原則、自然に依存しているという点です。しかし、ここでいう「自然への依存」ということは、単にヒトが自然に対して一方的に頼り切っているという意味ではありません。後からみていきますが、ハチの飛来に適した場所の選定、ハチの好む巣箱の製作、ハチをおびき寄せるためのさまざまな工夫など、ヒトの側からの積極的な働きかけがその過程には存在します。

ニホンミツバチの伝統養蜂は、こうした「自然への依存」という特徴とともに、養蜂がどのようなかたちで存立してきたのかといった知識や技能の獲得や展開＝伝承形態、そして、個々の場面で駆使される知識や技術の具体相に特徴

があるといえるかと思えます。

伝統養蜂の知識や技能は、専門的な知識をもった技術者や研究者の指導などの学習教育によったものではありません。また科学的な実験や観察に依拠した飼育を説くような専門の技術書によったものでもありません。第一次的には、山村といった自然と深くかかわりをもった生活が大きく関係しています。こうした地域で暮らす人びとは、自然と深くかかわる生活のなかで、それぞれの地域独自の自然認識あるいは自然知というものを、経験的実践的に身につけてきました。伝統養蜂をめぐるのもそれは例外ではなく、人びとは、ミツバチが生息する環境、ハチ自体の習性・行動を精査に観察し、熟知し、さらにそれらに独自の解釈を加え、野生に生息するハチを利用するための知識や技能へと高めてきたわけです。つまり、生活における自然との関係性のなかで、伝統養蜂の知識や技能は獲得されてきたといえるのです。

しかし、ただ、それらが一時代一個人の経験的な自然知・創意工夫によって伝統養蜂として体系化されたわけではありません。まさに伝統養蜂と呼ばれるように、その背景には、彼らが生活を営む地域を一つの範囲とし、そのなかで時間や世代を重ね、発見や淘汰の繰り返しがありました。そうした「伝承」文化としての特色も、伝統養蜂は内在しているのです。

さて、伝統養蜂の具体相をみていく上で、その前提として、次のような点にニホンミツバチの伝統養蜂の特色が浮かび上がってくるということを留意しておかなければなりません。それはヒトがどのようにしてニホンミツバチを獲得し、それをどのように飼養するのか、蜜をしぼるための技術はどのような方法なのか、といった点です。これらに注目しながら、それぞれの地域で展開してきた養蜂形態を比較分析することによって、最初に提示しました課題が次第に明らかになってくるのです。

言い忘れておりましたが、一つ付け加えておかなければならないことがあります。これまで、ここでは、伝統養蜂の現在という視点で、それぞれの地域がもつ自然と生活とのかかわり、そ

のなかでの「野の博物学者」としての人びとの観察眼、独自性、民俗的色彩を強く示すのだという伝統養蜂の特徴について話をしてきました。

しかしながら、ニホンミツバチの伝統養蜂を少し歴史的にみた場合、次のような点も考慮しておかなければなりません。それは、養蜂の知識や技能の「伝播」、産業としての「経済性」という問題です。近代養蜂が移入される以前、江戸時代において、いくつかの地方において、ここでいう伝統養蜂は一つの産業として成立しており、ハチミツは主要な産物として広く流通していました。

梅谷先生がお使いになられました「日本山海名産図絵」(1799(寛政11)年刊、本草学者木村兼葎堂きむらけんかどう(1736-1802)筆)には、江戸時代の紀州熊野、現在の三重県熊野市周辺でおこなわれていたニホンミツバチの伝統養蜂の様子や技術が克明に記されています。

産物としてのハチミツや蜜蝋ばかりではなく、江戸や大坂といった都市を中心に出版文化を通してミツバチを飼養するための養蜂技術が知られていたことが窺えてくるのです。

今日、現地調査において、はっきりとした技術の伝播の流れは確認することはできませんが、歴史を遡ったとき、そこに何らかの伝播が起りうるという可能性は考慮しておかなければなりません。

単年型の飼養と連年型の飼養

各地に伝承されるニホンミツバチの伝統養蜂をみていきますと、養蜂に大きく二つの形態があることに気づきます。一つは、ミツバチが分蜂する春の時期に、その地域の周辺の山野に巣箱を仕掛け、運良くハチ群が捕獲できれば、これを一定期間(およそ6月～11月初旬)飼養し、晩秋のハチ群が訪花行動をおこなわなくなり越冬にはいった時期に蜜をしぼり採蜜をおこなうというものです。この際、ハチ群をかまわず巣房ごと、巣箱からかきだすように蜜を採るものですから、ハチ群は死滅か逃去を余儀なくされるわけです。こうした採蜜の方法を、私たちは

2つの養蜂形態—知識と技能

- ハチ群の獲得・・・基本的に「自然に依存」
 - 2つの養蜂形態
1. 春に、自然から獲得したハチ群を、秋に採蜜する。ハチ群は死滅・逃去を余儀なくされる。「略奪」的採蜜
 2. 採蜜時に所有ハチ群を死滅させないように採蜜する。維持

「単年」型の飼養と「連年」型の飼養

図3

「略奪」型の採蜜といっていますが、こうしたハチ群獲得から採蜜までの流れをもった形態です。こうした「単年」型の場合、ヒトが管理下におく期間が非常に短いわけです。また仕掛けた場所から自宅近くへ移動する程度で、捕獲から蜜を採るまでの期間の行為を管理や飼養といえるかどうか、養蜂と呼ぶことができるのだろうか、議論が必要な事柄かも知れません。

もう一つは、ハチ群の獲得を野生の飛来群にだけ依存するのではなく、所有したハチ群から巣別れするハチ群を捕獲し、所有群を増やしながら養蜂を持続的にこなすという形態です。自分の所有群から新たなハチ群を獲得することは、所有した、自分が飼養しているハチ群を死滅させず、年を越えても維持するということをおこなって初めて可能になります。これには蜜を採らずに一年持ち越すという方法、一部だけ蜜を採り、ハチ群を死滅させないという方法があります。とくに採蜜時、ハチ群を死滅させずに蜜を採る方法には、ハチを維持するためのさまざまな工夫が施されています。

前者は、春、ハチ群を捕獲しその年の秋には蜜をしぼり養蜂が終了してしまうことから「単年」型と呼び、後者は、年を越えて複数年で飼養維持することから「連年」型、「歴年」型と呼んでいます。

「連年」型の形態について、もう少し補足すれば、「連年」型にはさらに2つの形態があって、先に述べたような1つの巣箱の巣房一部だけを切り取りハチ群を維持する形態と、蜜を採る巣箱と越冬させる巣箱を決めておき、蜜を採る

巣箱は、「単年」型のように一切巣房を削除しハチ群を死滅させてしまうというものです(図3)。

この二つの養蜂形態については、具体的な二つの地域を事例として取り上げながら、詳しく見ていきたいと思います。

ここで取り上げる事例は、東北地方と四国地方の事例です。東北地方の事例は、福島県会津盆地の南縁山地に位置する東尾岐地区、行政区分では会津美里町(旧会津高田町)に属します。一方、四国地方の事例は、愛媛県石鎚山系のなかに位置する東川地区、行政区分では上浮穴郡久万高原町(旧美川村)に属しています(図4)。

「単年」型の養蜂形態

東尾岐地区でおこなわれてきた伝統養蜂は、典型的な「単年」型の特色を示す事例といえるかと思います。この地区では、ニホンミツバチをヤマバチと呼び、捕獲・飼養に利用する巣箱をミツバチタッコ、タッコと呼んでいます。梅谷先生が紹介された巣箱の写真にもありましたような丸太をくりぬいた円筒形をし、下部の出入り口を設け、上下は板が釘うちされているものです。この地区でみられるミツバチタッコは、ほとんどこの形態です。材質は桐材が多く、そのほかサクラ、スギなどがみられます。

4月下旬、人びとは新たなタッコの製作や補修、さらに冬の間放置しておいたタッコの掃除をおこない、5月に入ると、それぞれが適所とする大木の根元、祠堂の軒下などにこれを仕掛けます。5月から6月の分蜂時期になると、人



図4

びとは仕掛けたタッコの見回りをし、ハチ群が飛来するのを待つのです。ただ待っているというだけではありません。タッコの内部や出入口部分にハチミツをつけたり、アリなどを追い払ったり、ヤマバチをおびき寄せるための工夫を怠りません。

このとき、運良くハチ群が飛来し営巣すれば養蜂は成立しますし、飛来しなければ、また来年の"楽しみ"となるのです。しかし、ここで注目しておきたいことは、人びとが必ずしもハチ群の飼養だけに目的といいますか、"楽しみ"といいますか、をおいているだけではないという点です。この分蜂時期に、自らが製作した巣箱を仕掛けこれにハチ群が入るかどうか、これ自体を楽しんでいるのです。このことも伝統養蜂の重要な特徴の一つだと思います。

ハチ群が仕掛けたタッコに営巣すれば、人びとは自宅周辺にタッコを移動します。天敵であるクマの襲撃を回避するためです。実際、クマの襲撃をうける頻度は年々高くなっています。こうして半年弱の期間、管理下におき、ハチの出入りがなくなりハチ群が越冬に入ったのを見計らって蜜をしぼることになるのです。先ほど申し上げましたように、この地域の採蜜の方法は、タッコからハチごと巣房をかきだし、蜜をしぼるというものです。そのため、ハチ群は死滅、逃去を余儀なくされます(図5)。

蜜のしぼり方ですが、この地区では、鍋で巣房ごと一度煮てドロドロの状態にします。これを冷まして蜜と蠟が分離すれば、蠟だけ取り除き蜜を貯蔵するのです。これが東尾岐地区の養

図5

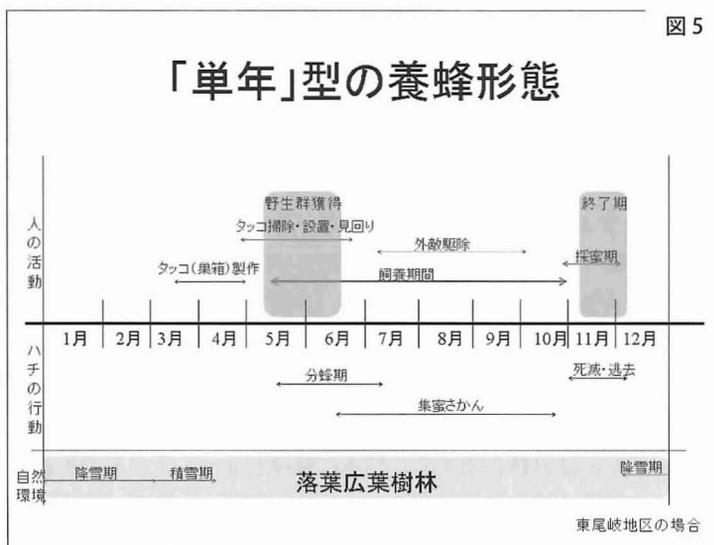
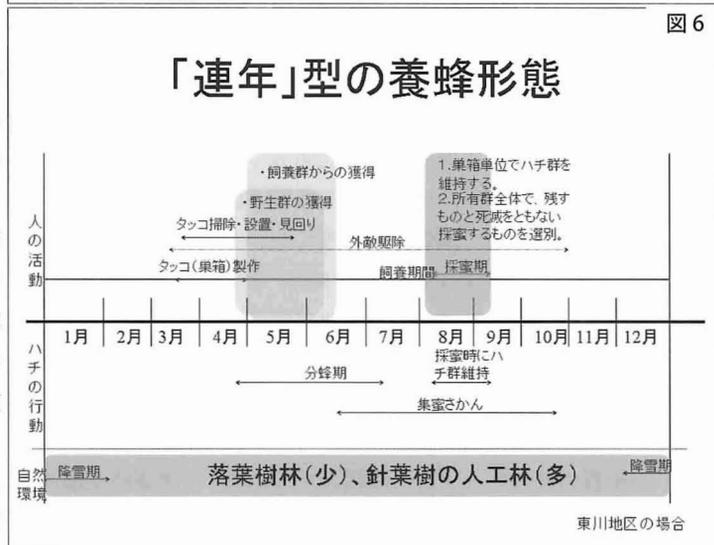


図6



蜂のサイクルです。

「連年」型の養蜂形態

次に、できるだけハチ群を維持しながら、連年で飼養するという例を紹介します。この形態の養蜂は、西日本に顕著にみられます。ここでは具体的に東川地区の事例で紹介いたします。この地域では、ニホンミツバチをミツと呼び、巣箱をミツドウ、ドウと称します。ミツドウには円筒形の丸太をくり抜いたマルドウ、板材を張り合わせて製作されるカクドウ、ハコドウの2種類があります。どちらミツドウも上部の板は釘で打ち付けますが、底は板をはらずに底抜け状になっていて、これを平らな台の上ののせるだ

けです。これには理由があって、分蜂期の把握、飼養中のハチ群の管理上の役割、ハチ群を死滅させず維持しながら採蜜する方法と関連によるものです。

この「連年」型の場合、ハチの分蜂期、ハチ群を拡大するために2つの手段が用いられます。一つは「単年」型の事例と同様にミツドウを適所に仕掛け、山野から飛来するハチ群をミツドウに誘引するというものです。もう一つは所有しているハチ群から巣別れする分蜂群を捕獲し、新たなミツドウに営巣させるという方法です。これには分蜂して近くの枝木に蜂球となったハチ群を、袋などで捕獲し、人為的に別なミツドウに入れる場合と、分蜂したら飛来しそうな付近の適所にミツドウを仕掛け、飛来するのを待つのです。「連年」型の場合、このようにいくつかの捕獲の方法を組み合わせ、所有群を維持あるいは増やしていくのです(図6)。

ところで、「単年」型である東尾岐地区と「連年」型の東川地区には、飼養中の管理においても大きな違いがあります。それは、ニホンミツバチの天敵であるスムシ(ハチノスツツリガ/ウスグロツツリガ)の存在を認識しているかどうかといった点です。東尾岐地区では、人びとはスムシの存在を知りません。一方、東川地区では、ハチ群の逃去・ハチ群の衰弱の一つの原因に、スムシの発生・繁殖が大きく関係していると認識しています。そのため、東川地区では、定期的の下から内部状態を確認するという観察作業を怠らず、また巣房のかす片が台に落ちていればこまめに掃除をし、スムシの発生を防ぐのです。これもミツドウの底部を底抜け状にしてある理由です。

さて、採蜜ですが、この地域では、7月下旬から8月上旬にかけておこないます。切り取った巣房から蜜をたらず作業において一番よい気象条件であること、巣の一部を取り去っても、再び、越冬で必要とするだけの蜜を貯蔵できる期間を残しておく、といった理由です。

採蜜の方法ですが、一つは採蜜するミツドウと採蜜しないミツドウを区別し、採蜜するミツドウはハチもろともすべて取ってしまうという

ものです。この場合、採蜜した巣房のハチ群は、「単年」型と同様に死滅、逃去することになります。

もう一つの方法は、巣をすべて取り去らず、その一部を残し、ハチ群を維持するというものです。複数の巣房から存続させるものを選択するのではなく、巣房個々にハチ群を維持するというものです。

この方法は、音や振動に敏感で、臆病なニホンミツバチの習性をうまく利用した採蜜方法です。この採蜜方法は、まず巣房が壊れぬようにミツドウを静かに上下逆さまにします。この状態を「はのけ」と称し、次に円錐形に丸めた筵むしろを上になった開口部にかぶせるのです。つまり、開口部と開口部を合わせるわけです。そうしましたら、ミツドウの側面を下の方からゆっくり上の方へと金槌や木槌でトントンと叩きます。すると、ニホンミツバチは、上へ上へとあがり、最終的に筵へと移動していくのです。ほとんどのハチが筵に移動したのを見計らい円錐形にした筵を、そのままの状態でもミツドウからはずし、一時、少し離れた場所へ置いておきます。

ほとんどハチがいなくなったミツドウから、内部の巣房を10枚あるとすれば4~5枚切り取ります。その際、巣房の天井と側面部分の接着部を切除するために、2種類の小さな鎌状の刃のついた道具を使用します。

必要なだけの巣房を切り取りますと、ミツドウの上下をもどし通常の状態にします。そこへ円錐形の筵に移動させておいたハチ群を再びもどすわけです。

今度は、筵へ移動させたときは反対に筵をできるだけ下にし、ミツドウの開口部に近づけます。すると、ハチ群は少しずつミツドウの方へと移っていくのです。これで、巣房の切り取りは終了し、うまく元のミツドウに戻ったハチは、2、3日で通常の訪花活動を開始するようになります。

切り取った巣房から、蜜をしぼる作業ですが、東川地区では、大きな鍋を下に置き、その上に切り取った巣房をザルやネットに入れてのせ、日光や気温で自然に蜜がたれ落ちるのを待つ

です。このように夏の日差しを利用して蜜をしぼります。それは「しぼる」というよりもむしろ「たらす」といった方がよいかも知れません。東川地区の場合には、このような形態を有しているのです。

このようにニホンミツバチの伝統養蜂をみていきますと、「単年」型と「連年」型に類型できる2つの基本的形態に類型をみいだすことができますのです。しかも、東日本は「単年」型の、西日本は「連年」型の傾向を強く示すというように、養蜂形態の違いが「地域差」として表れているのです。

さらに、このような「地域差」が生まれる要因には、次のような環境とのかかわりということも指摘しておかなければなりません。「ヤマバチは、毎年来るものだ」といい、春に捕獲したハチ群を、秋には死滅させて蜜をしぼる東尾岐地区の養蜂は、一見、残酷で、資源の枯渇につながるように映るかも知れません。それに対して東川地区の養蜂は、ハチ群を死滅させないようにして維持しようとする技能が勝っている、といった評価があたえられるでしょう。狭義に養蜂の知識や技能だけをみると、確かにそうなのですが、それぞれの地区周辺の自然を含めここに表れた状況を検討してみますと状況は一変します。東川地区では、古くから針葉樹の植林がおこなわれ、大部分が人工林におおわれハチの営巣に適したような雑木や野生の訪花植物が少ないに気づきます。一方、東尾岐地区は、降雪や標高の高い山々に囲まれているという環境が針葉樹などの人工林の造林を妨げ、ハチ群が野生で営巣できるブナやトチなど落葉広葉樹といった環境が少なからず保たれているのです。

伝統養蜂の形態の差異を考える上で、こうした環境についても考慮に入れておかなければならないのです。

伝統養蜂の「労働」と「資源」の性格

自然からハチ群を獲得し、これを飼養し、最終的に蜜をしぼるという一連の流れの中で、知識や技能を展開させる伝統養蜂は、少なくとも

一つの「労働」であることはいうまでもありません。伝統養蜂を「労働」という視点でとらえたとき、形態的には大きく二つに類型できるこの伝統養蜂には、他の「労働」とは異なる伝統養蜂に共通したいくつかの特徴を見いだすことができます。

これまで何度かニホンミツバチの伝統養蜂は、対象であるミツバチを常に「自然へ依存」することによって、存立・継続していると申し上げてきました。

都市化され近代化された今日の生活に目を移してみても、生活に必要な「もの」は、直接あるいは間接的に自然の資源に依存しなければなりません。ニホンミツバチを「自然資源」と置き換えてみたらどうでしょうか。

伝統養蜂には、自然資源の利用の原初的といえますか、原型的といえますか、ヒトが「自然資源」を、どのように〈認知〉、そして〈加工〉し〈利用〉してきたのかという「自然資源の利用」におけるヒトの側のかかわりかた、役割が顕著にみいだせます。まさにこの具体相こそが伝統養蜂のもつ「労働」の特徴の一つです(図7)。

さて、ニホンミツバチの伝統養蜂は、資源としてのミツバチを「自然に依存する」という特徴をもっているのと同時に、一方で野生のミツバチを生かしたままの状態でのヒトの管理下におこうとする行動(飼養)も併せ持っています。このような「自然(野生生物)」をいかに「文化(生活や生業)」において組み込むか(利用するか)という思考は、ヒトが野生生物を「家畜化」してきた過程、あるいはそ

「労働」の性格

自然に何らかの働きかけをし、自然を「加工」という、労働の本質を見ることができる。…野生のミツバチを〈資源〉として「認知」し、人間の管理下におくために、自然への働きかけとして、さまざまな技能を駆使する。

〈特徴〉

- 生業ではない。また副業でもない。
- 経済的価値が低い。
- 〈遊び〉(趣味的)な生産活動である。
- なくてもよいような生産活動だが、広くみられる。

の前段となる「半家畜化」の状態を考えていく上での重要な指標を与えてくれるのです。

最後になりますが、伝統養蜂の「労働」としての特徴には、もう一つ興味深い点があります。それは伝統養蜂が、家の生計を支えるような生業、あるいはそれに準じるような副業といった生産活動として位置づけられているものではなく、どちらかといえば、「遊び」や「趣味的」といった性格を強くもっている点です。養蜂家の方でしたら、ミツバチを飼うことはまさに本業であり、それが経済的基盤となる。しかし、伝統養蜂の場合、そうではない。ニホンミツバチを飼養しながら本業はちゃんともっていて、生計活動にはこまらない、伝統養蜂に従事しなければ生活できないといったものではないのです。つまり、経済的意味合いがほとんどないに等しい「労働」といえるのです。

近年、こうした生業や副業にも属さない、「遊び」ともいえそうな〈取るに足りない〉生産活動に関心が集まっています。人類学者の松井健さんは、これをマイナー・サブシステムと呼び、その特徴として、1) 経済的な意味は、それほど大きくない。2) しかし、ある程度の経済的意味はあり、その成果は換金された以上に高く評価される社会性を有する。3) 十分な技法的習熟が要求される。4) 自然との密接なかわりを示す。5) 比較的単純な技術水準にあって、それゆえに、高度な技法が必要とされる。6) 従事者はごく少数、7) ときには生業や生活に制限を加えることもある、などを指摘しています。伝統養蜂の従事者は、農業、林業あるいはサラリーマンといった職業をほとんどがもっ

ています。ハチの分蜂期は、田植えなどの農繁期と重なり、時にはそれに優先したりもします。採った蜜は多くが自家用ですが、ときには高値で取引されたりもするのです。そういった点も含め、ニホンミツバチの伝統養蜂は、まさにこのマイナー・サブシステムに範疇に属する生産活動なのです(図8)。

まとめ

そろそろまとめにしたいと思います。以上のように、ニホンミツバチの伝統養蜂を見てまいりますと、伝統養蜂それ自体のもつ特徴、伝統養蜂を通して考えることができる自然とヒトの生活とのかかわり、自然や環境の問題など、多くの興味深いテーマがこの中に含まれていることがおわかりいただけたのではないかと思います。

今日、日本に2種類の養蜂が存在するわけですが、それぞれに異なる歩みを持ち、目的や役割が異なっています。ミツバチという昆虫をあつかい、日本の自然と生活と深いかわりをもつという点で、それぞれが興味深い対象だと考えています。中でも私がニホンミツバチの伝統養蜂に関心をもっているのは、経済的にはマイナーな生産活動でありながら、自然とヒトとのかかわり、さらに自然を介してのヒトとヒトとのかかわりを明らかにしていく上で、多くの示唆を与えてくれるからです。地域の中で、先輩たちから知識を受け継ぎ、自らも創意工夫をこらす技能の特異性、マイナー・サブシステムとしての伝統養蜂のもつ社会的文化的意義、野生のミツバチを利用するという「半家畜化」の問題、さらには日本人の自然観、労働観など、従来のミツバチそのものの生態学的研究や養蜂の農学的経済学的研究とは違った「ヒトの側からの見方」、「ヒトの側がみえてくる見方」、あるいは「ヒトの存在を組み込んだ」アプローチがあるのだということをご理解いただければ幸いです。

ご清聴、ありがとうございました。

(〒965-0807 会津若松市城東町 1-25

福島県立博物館)

マイナー・サブシステム

なぜ、経済的意味は希薄であるにもかかわらず、いまなお、盛んにおこなわれているのか？

- 経済性では計れない価値を、人びとが伝統養蜂にみいだしている。
- 経済性が全くないわけではない。「名人」「上手」といった社会的な評価につながる。
- ときに生業や生活に規制や影響を与える。
- マイナー・サブシステムとしての価値。